スポーツの指導哲学に関する一考察
― 上田薫の「動的相対主義」に着目して ―

後藤太郎＊1・久保正秋＊2

The Study on the Coaching Philosophy
― Coaching Principles Based on the Theory of Dynamic Relativism ―

by

Taro Goto and Masaaki Kubo

Abstract

This research sets it as the purpose of research to consider the new possibility of the thing of a “gap” generally denied paying attention to a “gap” which takes place at the sport instruction spot.

And he is an educational philosopher. The thought Kaoru Ueda’s “dynamic relativism” is conversely said up to a key as a “gap” at the sport instruction spot, and the state of the sport instruction spot is examined from a position.

Since a method of research took up Kaoru Ueda’s dynamic relativism and made the view apply to the sport instruction spot, it was presupposed that it is analyzed and inquired in Masaaki Kubo’s coaching circuit.

As a result of research, the leader considered his idea to be an absolute thing, and did not pour it into players, but it had consciousness of being what changing, and it was suggested by catching relatively in all the stages of a “coaching circuit” that new sport instruction philosophy is created.

Thereby at the future new sport instruction spot, thought called dynamic relativism will become an important view.

はじめに

スポーツ[1)]の指導実践において，指導者と選手たちとの間には多くの「ずれ」が存在する。指導者が考えるところのチームの目標や目的，練習計画，戦術や練習方法，スポーツの価値などは選手たちの考えと全て一致している訳ではない。このようなスポーツ現場の「ずれ」は時として大きな問題に発展することがある。指導者は様々な方法でこのような「ずれ」をなくそうと試みる。そして指導者の考えと選手たちの考えが一致し，全く「ずれ」のないチームが理想であると考える。しかしながら，「ずれ」とは，本当に悪いことなのだろうか。スポーツの世界における「ずれ」に新

＊1　東海大学大学院体育学研究科　　＊2　東海大学体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科

たな可能性はないのだろうか。

本研究は，スポーツ指導現場での事象，そこで起こる「ずれ」に着目する。そして教育哲学者である上田薫の思想を手がかりにスポーツ指導現場において「ずれ」という立ち位置からスポーツ現場の在り方を検討することを試みるものである。今回の報告では，上田薫の「動的相対主義」を取り上げ，それを久保の「コーチング回路」の中で検討することによって，スポーツの指導哲学研究のための基礎的資料を提示することを目的とする。

1．上田薫，そのプロフィールと理論

1）上田薫のプロフィール

上田薫（うえだ　かおる）のプロフィールは以下の通りである。1920（大正 9）年，大阪生まれ。1942（昭和 17）年京都大学文学部哲学科に入学。翌年千葉稲毛の高射学校を経て見習士官として中国へ（終戦後少尉）。復員後まもなく文部省へ入り，小学校社会科学習指導要領の作成に加わるが，この社会科の取り組みが彼の思想に後に大きく影響することになる。1951 年（昭和 26）以降名古屋大学，東京教育大学，立教大学，都留文科大学（学長）で教鞭を取る。その間に日本教育学理事（1974-1992），教育哲学代表理事（1983-1989 年）等務める。1958 年の発足当初より「社会科の初志を貫く会」の中心メンバーとして研究・発言をおこなっている。1992-1994 年「上田薫著作集（全 15 巻）を刊行。上田薫の母方の祖父は西田幾多郎である。

2）上田の動的相対主義

上田の動的相対主義は人間形成の論理であり相対主義が動的に展開されることが最大の特徴である。動的相対主義は絶対主義と対立し，またたんなる相対主義とも異なる。そして，真理へ接近するために力を尽くすが，そこには絶対に到達することがないという自覚を明確にもつものである。目標と実践の結果とは厳密に見れば一致することはないという考えは，目標という仮構を目指す過程こそが実在であるということである。しかしながら，動的相対主義は最初から普遍を諦めるのではなく，相対性という関係の中でそれぞれの主体性を大切にしながらあくまでも実践での目標という仮構を追究し，こだわりぬくことでギリギリまで接近しようとするのである。その意味においてむしろ普遍を大切にする立場なであるといえる。つまり実践においては，その結果が真実ではなく，その過程こそがリアルな現存在であり真実なのである。多くの実践には，その当初の目標，計画とその結果の間には「ずれ」が存在する。上田は抽象的な達成という理想と生の実践との間には「ずれ」があるとし，多くの指導者はこの達成の質に対して曖昧であると批判する。このわずかな「ずれ」が現場の真実であり，それを認識することが究めて重要である。上田は指導者が未来性の原則と間接性の原則を踏まえた相対性を自覚した価値を選択することが教育の本質であるとしている。実践において指導者が相対性を自覚したとき，あらゆる関係の「ずれ」に気付くはずである。そしてその「ずれ」の捉え方次第によって，「ずれ」が物事の新しい可能性の契機になるのとではないかと上田は考える。

論理とは一般的に「一」を基準として成り立っている。しかし上田の見方では実践とは無数でも一でもなく，現実的には「数個」からなるものである。つまりそれぞれの関係が具体的に動いているとき，数個の「ずれ」が生み出され複数の方向が生まれているのである。それはバラバラな多ではなく，刻々と変化する「数個」の拮抗関係による動的な過程であり，関係はバランスを整えて破られ，またバランスを整えて破るということを繰り返す。その過程において関係は平衡（動的調和）する。まさに平衡の核心である関係，すなわち「ずれ」に着目することによって生きた関係が捉えられるのである。上田は言う「必然を仮構の一とし，過程こそ実在だとする立場において，数個の世界は偶然を有意義なものとして位置づけ働かせるプロセスそのものにほかならない」[2)]。過程の展開に必要な人間の選択，決断の基準は，その過程の中で求められるべきであり，現場における指導者は実際に到達できないことを自覚しながらも，なおそれを志向することこそが動的相対主義の在り方である。過程を実在とする立場は抽象的な世界よりも具体的な世界を重視することなの

である。

2．久保の「コーチング回路」

久保の「コーチング回路」はコーチングを一つのプロセスとして考えたものである。久保は「コーチング回路」を次のように説明している。「コーチング回路」のプロセスは「哲学」―「計画」―「組織化」―「経営」―「評価」の各段階から成り，最後の段階「評価」は「哲学」へフィードバックする。「組織化」―「経営」は一般的なマネジメントサイクルの「実行」の段階をふたつに分けたもの。そして，「計画」に先立つ「哲学」の段階を設定した。これら一連のプロセスをひとつの「回路」として捉え直し「コーチング回路」と名づけた（図1）。この「コーチング回路」を作動させ，さらに再構成していくことがコーチングであり，それを「コーチング実践」と呼ぶ[3]。「コーチング実践」，すなわちスポーツの指導実践における過程はこれで説明する事ができる。この「コーチング回路」の中で上田の動的相対主義を考えたときスポーツの指導実践にどのような可能性が生まれるのだろうか。

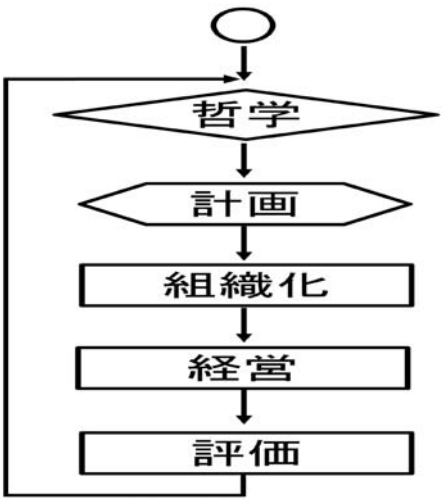

図1　久保のコーチング回路

3．コーチング回路の各段階における動的相対主義の応用

1）哲学

ここでは上田の「現在の未来に対する相対規定」という考えに基づいて，コーチング回路の「哲学」における基本的考え方を検討する。

上田は「教師は子どもを指導しなければならぬ。意味ある内容を与えなければならぬ。しかしそれは，現在の未来に対する相対規定，すなわち間接性にもとづくときのみ正しく行われるのである」[4]と述べる。

教育は未来にかかわることをその本質としている。スポーツの指導も同様である。経験した過去はそのひと独自のものである。その指導内容の意味は未来において良くも悪くも変様する。動く世界と動く自分がその動く指導内容とかかわりながら生きるからであろう。この動く事物が相対的な関係であるならばお互いが動くことによって変様し続けるのである。人と事物との関係は永遠に普遍ではない。たとえばスポーツの記録は数字として残るが，その数字が普遍的に同じ価値として存在することはできないのである。それは関係においてすべて（世界）が動いて変わるからであろう。つまり経験は未来へそのまま流れていくのではなく，未来へと作用するものなのである。指導者は指導空間において選手の主体性と自分の指導を相対的に捉え，間接性を成立させて未来に導くことが使命なのである。

指導者の考えを直接つぎ込もうとすることは指導ではない。「未来」は予測できても絶対に決定することはできないのである。目標を絶対的に規定して指導しようとすることは，間接性，未来性の無視であると言える。つまり選手の主体性，選手の具体的な捉え方を考えていないのである。その結果，実際はどうなるかわからないという事実を無視してしまうのである。指導者は，自分の教えたことが選手の成長において間接的にしか働かないということを自覚しなければならないのである。先に述べたように，目標を絶対的に規定して選手に迫ろうとすることは，未来性，間接性を無視することである。最初に立てた目標や計画は抽

象化し，具体的な事実と衝突してずれる。しかし指導者はその「ずれ」を無視し，最初に立てた目標や計画を固定化して進んでしまう。そして結局，指導者が自分の考え方を選手に押し付けて注入してしまうことになるのである。このような指導者による注入ではなく，選手がものごとを自分で考えたとき，はじめてスポーツの指導は動きだすのではないだろうか。

コーチング実践はその哲学の段階において，このような指導観でコーチング回路を作動させなければならない。スポーツの指導現場において指導者と選手が未来を目指して相対的にかかわったとき，指導における間接性という働きは，主体性（指導者）と主体性（選手）のぶつかり合いとなるのであって，そこに，指導者による注入ではなく，本当の意味での指導が生まれるのである。

2）計画

ここでは上田の「計画を仮構として位置づける」という考えに基づいて，コーチング回路の「計画」の段階における基本的考え方を検討する。

上田は「単線的な一本調子の計画は，計画の本質からはるかに遠いものだといわねばならない」[5]と述べ，さらに「破られてこそ，かえって生きる計画，すなわち破られるための計画である」[6]と述べる。

「指導」とは広辞苑によれば「目的に向かって教え導く」である。そして「計画」とは「物事を行うに当たって方法，手順など考えを企てる」ということである。従って指導の計画とは目的に向かうための方法や手順を考え，具体的に方向づけをするということである。計画とは未来に向かって進むものであり，未来に向かうものである以上，未確定であることに間違いない。しかし指導者はその未確定性を忘れ，指導者自身の理論や経験などの偏った関係で打ち立てられた自らの計画にやがて支配されるようになる。指導者は目的に向かう過程において計画と実践の整合性に僅かな誤差を知覚しているが，実際にはそれを確認することはなく，「自分の立てた計画」という自負によってその問題を放置し，曖昧にしたまま計画を進行してしまうことがある。そして指導者は自分の世界に入り込み，問題を修正する柔軟性を失うのである。ここにおいては，選手との関係はすでに存在していないということが大きな問題なのである。

スポーツの指導計画における「一本調子の計画」とは，例えて言うなら，電車の線路のような計画の捉え方である。電車の線路はハッキリとした方向はあるが柔軟性はなく見動きが取れない。指導者がスポーツの指導現場においてこのような計画を立て，選手をその手順に沿って線路の上だけを走らせたとするならば，仮に成功したとしてもそれは真実の意味において成功したと言えないであろう。プロセスの具体性は無視されており，その結果だけで判断しているにすぎないのである。その線路に乗って走った選手は，もしかすれば，たまたまその一回だけ上手くいったのかもしれない。本当は選手の意志とは異なる方向であったのかもしれない。そしてその選手には別の可能性があったかもしれないのである。

おそらくスポーツ指導において計画なくして選手を目的に導くことは出来ない。優秀な指導者はあらゆる計算をし，厳密な理論に基づいて計画を立てるだろう。しかし関係個々が実存的にかかわるとき，そこには指導者が予想もつかないような関係が生じるのであり，おそらくどんな優秀な指導者でも，100％計画をコントロールすることは不可能である。上田の計画とは線ではなく幅をもった帯のようなものとして考えられるであろう。指導者の主体性と選手の主体性が相対的にかかわっているとき，「方向の幅」の中でそれぞれが生き生きと進み，動きながら関係を調整することで新しいバランスが生まれるのではないだろうか。上田の「計画を仮構として位置づける」という考えは，このような可能性を示唆しているのである。

3）組織化

ここでは上田の「知識の二つの相対性」という考えに基づいて，コーチング回路の「組織化」の段階における基本的考え方を検討する。

（1）スポーツ技術

指導者は自らのスポーツに関する知識（技術）をどのように捉える必要があるのだろうか。上田

は知識には二つの相対性があるという。一つは「個人が知識を獲得し活用することは個人的にしか行われないという相対性」[7]であり，もう一つは「知識自体がつねに自己否定的に発展し新しくならざるをえないという相対性」[8]である。一つ目の相対性とはいくら選手に知識を詰め込んでも，その知識はそのまま正しく表現できないということ。つまり知識は人間（選手）というフィルターを通ることによって，同じものとしては存在しないということであり，またその知識がそのままの形で生きるとは限らないということである。スポーツにおいて，知識を技術に言い換えれば，新しい技術を習得するとき，過去に習得した技術は生きようとする。たとえ個人にその新しい技術（知識）を教えても，そっくりそのまま同じように出来るのではなく，その人なりの捉え方でしか習得できないのである。つまり指導者は，上田のいう「個人が知識を獲得し活用することは個人的にしか行われないという相対性」を自覚する必要があるのである。

二つ目の相対性は「知識自体が自己否定的に発展する」[9]というものであった。つまり知識（技術）を構成する関係自体が変わり，その反応によって知識（技術）自体が変容していくというものである。スポーツにおいて，技術を構成する複数の関係の中で一つの要素が新しくなったとき，その全体としての技術の意味は変わることがある。たとえばサッカーのシュートにおいても，キック時のパワーとグレーディングとの関係の変化だけでも，プレーの選択判断，目的，目標，結果の意味に影響する。すなわちスポーツ現場の実践における技術（知識）は，すべての関係を片方だけに比重をかけて見るのではなく，関係を動的に相対的，つまり動くものを向き合わせて見るということが重要なのではないだろうか。

（2）チーム戦術の組織化

そしてこの「知識の二つの相対性」という考え方は，選手個人のスポーツ技術習得における問題だけではない。たとえば新しい指導者が新しい戦術的理論をチームに指導したとする。しかしその理論はそのまま存在できるではなく，以前のチームの履歴に反応する。どんなに優秀な理論であったとしてもその新しい理論は結局，過去の理論と現在の理論が融合した独自の未来にしかなれないのである。優れた指導者，そしてその優れた理論（戦術）が必ずしも成功を約束しないのは偶然ではなく，選手たちの実存というフィルターを通して実現するということがその理由なのである。それでも成功する指導者は，その新しい環境と自分を相対的に位置づけ調和させることができる人物なのであろう。つまり自分をずらすことができ，プレイにおけるすべての関係の化学反応を計算することができる指導者である。その事実をもとに自分をずらして自分自身も新しく創る柔軟性をもっているのである。

上田は「ひとたび具体的に事態の核心に迫るならば，目標の実現とは，意図ある形で裏切られたということ，言い換えれば発展性のあるずれが生じたということにほかならない」[10]と述べている。この上田の言葉を戦術に当てはめてみたとき，チームとして最初に目指された戦術は，それぞれの細かな関係において現実に「ずれ」が生まれ，完全には達成されないかもしれないが，逆にその「ずれ」によってチーム戦術という総体は自己否定的に発展していくと考えることができる。戦術の指導が未来に向けたものであるということ，つまり試合のための戦術とは未来のものであるならば，先に述べた上田の「現在の未来に対する相対規定」という考えに従えば，それは不確定なものとなる。その不確定な未来の，どんな状況においても応用が利いたプレイを実践することが選手として大切なことである。この，応用が利くということは，戦術に支配されていない証拠であり，きちんと個人の解釈でプレイ状況に合わせることができるということである。すなわち選手たちが，戦術と自らのプレイを相対的に捉えることができたとき，その戦術は選手独自のものになるのである。そしてそのとき戦術自体が「自己否定的に発展する」のである。このように，戦術が選手の成長発展のかかわりとして動的に相対的に機能したとき，そしてそのような意図のもとに戦術の指導が為されたとき，新たに戦術は創造されるのではないだろうか。

4）経営

コーチング回路の「経営」は実際のスポーツ指導実践の段階である。ここでは上田の「動的調和」，および「数個の論理」という考えに基づいてスポーツ指導における具体的な実践について検討する。

（1）動的調和

上田は「ずれとは仮構とそれに対する現実的接近のあいだに残るくいちがいをいう」[11]と述べる。スポーツの世界は日々進歩し，理論，技術，戦術など様々なものはそれらの関係の中で動いて変わるはずである。しかしながら現実では，その時点で自らの捉えたものを絶対化し普遍と位置づけ，それを選手たちへ一方的に注入しようとする指導者は多い。そして指導者は，自らの与えたものがそのままの形で選手たちに表現されることによって満足感を得る。そしてそのとき，その内部では「ずれ」が起こっているのである。この表に現れない「ずれ」は放置されたまま次に向かうことになる。しかし現場におけるこのような「ずれ」があるからこそ，選手たちは悩み，考え，そしてこの「ずれ」を克服するために，自分なりに調整してバランスを取ろうとするのである。指導者がこのような「ずれ」を認めず，一方的に注入し続けるのであれば，選手たちは本当の自分に向き合うことは出来ない。

スポーツ現場での抽象と現実に起こっていることの「ずれ」を具体的に解決するには，まずその理想や自己の存在を絶対化するのではなく，関係においてあくまでも相対化した存在として設定することが前提となる。上田はこの具体性と対比させた表現として仮構という言葉を用いている。「仮構」とは広辞苑によれば「仮に構えること」である。上田は「人間はだれでも自分にとって真理と考えられることが，他の人にもそうであることを願って生きている。あるいはそうであることを目指して生きている。それはどうしようもない生の真実だといわねばならないであろう」[12]述べる。つまり指導者も，選手たちも何か自分がそうだと思うことを捉えるが，いつまでたってもそれに捉われてしまい，どうしてもそれが普遍であると固定してしまうのである。計画や目標を普遍とするのではなく「仮に構えること」ができるか。すなわち様々な関係における事物を絶対として位置づけるのではなく「仮構の一」として志向していくという態度こそ現実性のある考え方と言えるのではないだろうか。スポーツ現場で起こっている「ずれ」を動的調和（動くバランス）させること，すなわち主体性と協調性，具合とバランスの移動によって新しい創造を起こすことには，まずこの「ずれ」の構造が働き，その過程において自己を発展させていくことが必要である。上田の「動的相対主義」とは現場という現実の中で，あくまでも生きたものを捉え，しかもそれを生かしていこうとする論理であると言えよう。スポーツ現場における「動的相対主義」とは，仮構という目標を媒介としつつ，相対性の自覚のもと，指導者と選手たちが，互いに主体的に動的なバランスをとることであり，そこに新しい自己が創られていくという「実存の論理」なのである。

（2）数個の論理

スポーツ指導の実践は選択の連続である。練習内容の選択，メンバーの選択，戦い方の選択など，ありとあらゆるものを選択していかなければならない。選択は価値と密接に関係しており，その価値によって判断されると言っても過言ではないだろう。上田は「数個の論理」という概念で，具体的に現場の実践論理をこう述べている。「論理というものは，ふつう一を基準にして成り立っていて，三とか四とか五とかは，その集合にすぎないと考えられるが，それを逆にして“数個”こそ，基底になるものであり，一はその抽象的契機にすぎぬとみなそうというのである」[13]。この考えの基底には，真理は動くものだという立場，あるいは真理は複数だという思想があると考えられる。もしそうであるならば当然，論理の仕組みそのものが一般のものと違うわけであるから，把握そのものを転換しなければならないということになる。それではこの「数個の論理」という考え方をスポーツの現場に置き換えて考えて見たときどうなるのであろうか。

サッカーの指導において，選手にパスの判断の

指導をするシーンを考えてみる。スポーツの現場では，一般的に指導者も選手たちもプレイを考えるとき，一つだけの手がかりではなく複数の手がかりを用いているものである。たとえば実践練習をしている最中に笛の合図で練習を一時止める（ゲームフリーズ）。そこで選手になぜそこにパスを出したかと聞くことがある。もちろんねらいは選手にその判断を考えさせるためである。選手は，目標，経験，現実可能な実践性，そして価値をふまえた上でその局面でのプレイを選択しなければならない。もちろんサッカーに普遍的な答えは存在しない。しかしその選手は何かを選択しなければならないのである。そのとき仮に正解が一つしかなければ答えは簡単であるが，それは判断とは言わず，思考を働かせる必要がない状態である。そしてもし答えが自由という無数ならそれはそれで迷ってしまい，どう動いていいか分からくなるであろう。しかし実際の現場ではその指導者も選手も一つではなくいくつかの手がかり，すなわち数個の手がかりでその局面を判断しているのが現実である。関係で構成される生の局面において全く同じ状況は絶対にありえず，そのつど「数個」を手がかりにその状況に合ったプレイを判断しているのである。スポーツの局面に限らず，普段の生活においても局面で我々は数個を手がかりに判断して生活しており，「無数と一の中間」[14]という上田の「数個」とは非常に現実的な考え方なのである。上田は「論理が選択形成されるとは，現在の論理の相対性が確認されるということと同様なのである。それ自体意味をもつ論理が複数存在することを意味しているのである」[15]と述べる。「数個の論理」という考え方でスポーツ指導を実践するためには，あらゆる世界を構成する関係を相対的に見ること，物事に絶対はないという不確定の自覚を持つことが前提となる。そして，いくつかの方向性そのものを相対的に見るということが重要なのではないだろうか。

5）評価

ここではコーチング回路の最終段階である「評価」について，上田の「多面的評価」および「関係追及評価」の考えに基づいて検討する。

（1）多面的評価

上田は「これまでの評価は，多面的にとらえることをきらってきた。なるべく一面的にとらえ，機械的に操作できることをねらってきた。それはいわば，子どもを善玉と悪玉とに区別してとらえようとしたことであり，両者を混ぜるにしてもたんに量的に混合する以上に出ようとはしなかったのである」[16]と述べる。

たとえばスポーツの１対０というスコア。サッカーならどんな見方になるだろうか。陽気な国民性で知られるブラジルではおそらく，「つまらない」と批判されただろう。守備の国イタリアならそれが「美しい結果」と評価されただろう。ところが近年において，ブラジルではヨーロッパ風にしっかりと守備を安定させることでチームを組織化しており，逆にイタリアでは攻撃的なパスサッカーを展開することで攻撃力を高めている。サッカーにおける１対０という評価はそれぞれの国で変容しつつあるのである。このように評価とは動くもので変わるものである。かつてのブラジルとイタリアなら，自分たちのサッカーに関する考えと逆の考えの良さを評価することはできなかっただろう。その当時，ブラジルにもイタリアにもそれぞれのサッカーに関する考えと逆のプレイが得意な選手が存在したはずであるが，その当時おそらく評価はされなかっただろう。このようにスポーツは，技術，戦術，倫理，価値など，あらゆる面において変容し続けているのである。この変容によって生じる「ずれ」に対応するためには，指導者も捉えた「一」に捉われず多面化しなければならないのである。つまり上田が言うように，一面的，量的，そして機械的に操作できる評価ではなく，多面的な，質的な評価が必要となるのである。

（2）関係追及評価

上田は「教師の評価する尺度の変化発展ということこそ，新しい評価が保証するもっとも根幹のものでなくてはならない」[17]と述べる。つまり多面的な評価とは，指導者の評価尺度，それ自体も動的に反省する必要があるということである。上田はこの動く評価を「関係追求評価」名づけ，教

師の予測からはみだす子どもの存在によって，「教師の子どもたちに対する評価尺度は，そこでしぜんに改められ発展せずにいないのである」[18]と述べている。

この上田の主張をスポーツの指導において考えれば，実践の中での関係において変化するのは選手だけではなく指導者も同じであるということだろう。指導者がこの関係における変化という状況に合わせない，つまり選手との関係において変化しないということは，自己満足以外のなにものでもない。そして選手との関係における変化は指導者の指導力を弱めるものではない。動くものと動くものを素直に捉え，生かすということである。上田は言う「正解を一つにしないという考え方は受けいれられないかもしれない。しかしだれが一つの答えを絶対的なものとして押し通し続けることができるであろうか，社会も学問も動いていくのである。また子どもたちのひとりひとりは個性的な思考体系をもち，それによってのみ理解することができるのである」[19]と述べる。関係追究による多面的な評価はあらゆるものを相対化しなければならない。スポーツ現場において指導者と選手という関係は動きながらかかわることで新しい評価基準は創られる。そして進歩するべきものである以上，評価する眼は常に変化し続けなければならないのである。

久保の「コーチング回路」における評価の段階は，その計画がうまくなされたかにおいてではなく，その哲学において評価されるものである。その評価は，指導者ではなく「選手がものごとを自分で考えたときスポーツの指導が動き出す」という哲学においてなされなければならない。そのためにも多面的評価が重要な要素になると思われるのである。

おわりに

今回の研究では，上田薫の「動的相対主義」を久保の「コーチング回路」の中で検討し，それによってスポーツの指導哲学研究のための基礎的資料を提示することを試みた。その結果，指導者は自らの考えを絶対的なものと考え，それを選手たちに注入するのではなく，それは変容するものであるという自覚を持ち，「コーチング回路」の全ての段階において相対的に捉えることによって新たなスポーツ指導哲学が創造されることが示唆された。

スポーツの指導現場には「ずれ」がある。「ずれ」というものは，一般的には否定されるものではあるが，その新たな可能性を考えることも今回の研究のねらいであった。そしてそこには，スポーツの世界における人間の在り方，つまりスポーツ指導の「哲学」が無視されて進んでしまっているという問題意識があった。スポーツ指導の実践において久保の「コーチング回路」を作動させるには「動的相対主義」という上田の思想はひとつのヒントになりえると思われ，今後のスポーツ指導現場において重要な見方になるのではないだろうか。

引用・注記および参考文献

1）本研究の対象とする「スポーツ」とは「競技スポーツ（Athletics）」であり，レクレーション的なスポーツはその対象とはしない.

2）上田薫（1992a）人間形成の論理．黎明書房，p.94.

3）久保正秋（1998）コーチング論序説．不昧堂書店，pp.106-127.
久保正秋（2010）体育・スポーツの哲学的見方．東海大学出版，p.261.

4）上田薫（1992a）前掲書，p.126.

5）上田薫（1992a）前掲書，pp.332-333.

6）上田薫（1992a）前掲書，pp.75-76.

7）上田薫（1992a）前掲書，p.28.

8）上田薫（1992a）前掲書，p.28.

9）上田薫（1992a）前掲書，p.28.

10）上田薫（1992a）前掲書，p.158.

11）上田薫（1993）ずれによる創造．黎明書房，p.145.

12）上田薫（1993）前掲書，p.141.

13）上田薫（1992a）前掲書，p.92.

14）上田薫（1992a）前掲書，p.54.

15）上田薫（1993）前掲書，p.145.

16）上田薫（1992b）前掲書，p.194.

17）上田薫（1993）前掲書，p.199.

18）上田薫（1993）前掲書，p.199.

19）上田薫（1993）前掲書，p.200.